

印度山日本寺開山五十周年記念

インド仏跡七日間の旅「報告」

東大寺録事 北河原公慈

平成二十九年より印度山日本寺第六世竺竺に就任された北河原公敬長老による印度山日本寺への団参、及び仏跡巡拝の旅は今回で五回目を迎える事となった。コロナ禍後初となる今回は印度山日本寺開山五十周年のみならず、その境内にある菩提樹学園四十五周年、光明施療院創立四十周年、更に仏教学東洋学研究所落成という大きな節目となる年であり、総勢四十八名のご参加をいただける事となった。

こういった巡拝団の場合、東大寺に集合した後、旅程の安全祈願法要を大仏殿で厳修し、出発するのが常であるが、今回は人数も多く、また二十名近くが近畿圏以外という事もあり、事前に北河原団長と筒井英賢副団長により十二月一日に祈願法要を厳修していただき、当巡拝団で使用する輪袈裟と経本を拝受し、出発に備える事となった。

十二月四日

巡拝団参加者は伊丹空港から出発し、一部は羽田空港で合流しインドの首都、ニューデリーへ向かった。コロナ禍以降は空港で大部屋を借りる事が出来なくなり結団式が出来ず、何とも慌ただしい出発となったが、当初予定十時間五分のフライト予定が九時間三十五分で済み、早めホテルでの休憩となった。

十二月五日

この日はデリー空港よりブツダガヤやラージギル、ナーランダ僧院など仏跡が多数存在するビハール州の州都、パトナへ移動し、パトナからはバスでラージギルへ向かい、釈尊が晩年を過ごし、観無量寿経や法華経を説かれたとされる霊鷲山を参拝、仏教を深く帰依し竹林精舎を寄進したとその因業から息子のアジャータシヤトルにより幽閉、餓死させられたビンビサーラ王の幽閉された牢屋跡などを観光し、ブツダガヤへ向かう予定だった。

筆者は次の日の日本寺での法要準備の為、パトナからブツダガヤへ直行し、同行出来なかったが、大分発展しているとはいえインドの交通事情は予測しづらく、結局ビンビサーラ王の牢屋跡より霊鷲山を遥拝し、ブツダガヤへと移動したようだ。



ブツダガヤのホテルでは幸い我々の団体で一部屋借りる事が出来、ここで初めて結団式が行われた。自己紹介もあり今回の巡拝団には団長

である長老の個人的な知り合いの方や、個人得度者、東大寺とお付き合いのある業者に所属しておられる方、真言宗山階派僧侶や融通念仏宗僧侶、果てはインド中部、ナグプールのにて得度され、上座部僧侶としての資格を持たれる方など様々な方々のご参加をいただいた事が分かった。

十二月六日

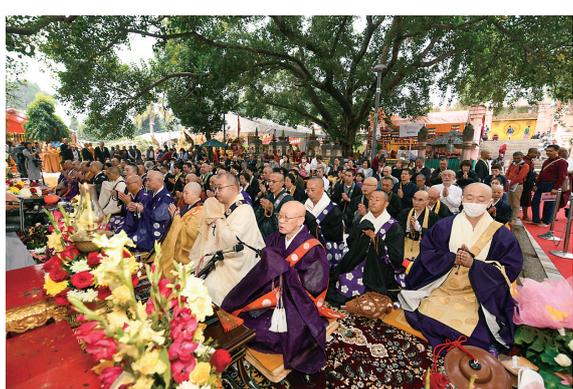
いよいよ今回の旅の一番の目的でもある印度山日本寺開山五十周年記念法要の当日である。

当日は偶然にもインドで大いに尊敬を集めるビームラーオ・ラームジー・アンベードカル博士(Dr. Bhimrao Ramji Ambedkar)の命日という事も有り、多数のインド人の方々がブツダガヤを参拝に来られておりとても賑やかな日であった。アンベードカル博士はダリット、所謂不可触民と呼ばれるカースト制度の最下層の身分の生まれながら勉学に励み、アメリカやイギリス、ドイツの大学に留学し、幾つかの博士号や弁護士資格を取得された方で、インド独立後は初代法相を務め、インド憲法の草案を作成した。彼の作成した草案を元にインド憲法が出来上がり、そこにはカースト制度の撤廃や差別の禁止が盛り込まれた。また彼はカースト制度、及びそれに付随してしまっている差別体制から解放される為にはヒンドゥー教から改宗しなければならぬと考へ、インド国内の全宗教を調べ、その中より仏教を選び、自らの支持者五十万人ものダリットと共に三帰依・五戒を受け

られる長老の個人的な知り合いの方や、個人得度者、東大寺とお付き合いのある業者に所属しておられる方、真言宗山階派僧侶や融通念仏宗僧侶、果てはインド中部、ナグプールのにて得度され、上座部僧侶としての資格を持たれる方など様々な方々のご参加をいただいた事が分かった。

二か月後、一九五六年十二月六日に亡くなられた。その出自、経歴、功績から今でも多数の支持者がおり、インドではかのマハトマ・ガンディーと並ぶ偉人として敬意を集めている。当時共に仏教徒になられた方々、及び新たに私淑して改宗した方々等が今でも多数おり、その方々がブツダガヤに参拝にいられていたのだ。

我々はホテルを朝七時に出発し、まずは釈尊成道のまさにその場であるマハボデー寺院(大菩提寺)に向かった。大菩提寺では特別に場所を取っていただき、釈尊が悟りを開かれた場所と伝わる金剛宝座より通路と柵を挟んだ目の前で法要を厳修させていただいた。この法要には当巡拝団や日本寺関係者だけでなく、隣山の上座部比丘、チベット仏教僧侶も参列いただき壮大に勤め上げた。



その後、一団は金峯山寺僧侶や真言宗僧侶の法螺貝を先導に練り行列を組み日本寺へ向かった。

日本寺本堂では当巡拝団を含む日本寺関係者一五〇名と、上座部比丘、チベット仏教僧侶二十名近くが集い、印度山日本寺開山五十周年記念法要を厳修した。法要は総本山知恩院副門跡であり、国際仏教興隆協会の理事長を務める中村康雅師の挨拶から始まり、上座部比丘の読経、チベット仏教僧侶の読経が読誦され、日本仏教僧侶の般若心経、竺三の表白、観音経偈文、如心偈の読誦と続き、読経の間に参列の皆様にご焼香いただいた。



表白に於いて印度山日本寺第六世竺王北河原公敬大僧正は、「印度山日本寺は五十年もの異国での法灯護持、無料保育『菩提樹学園』、無料施薬診療施設『光明施療院』といった宗教福祉活動、更には仏教学東洋学研究所の設立等、仏恩報謝の活動を行っている事」を述べ、続いて「しかし

世界に目を向ければ、他者を省みず己の主義主張を強弁する主潮があり、各地では戦乱やテロ等の殺戮報復の連鎖が続き干戈は治まる事を知らない。重ねて憂えるは、人心弛緩し私利私欲の我執に囚われ、愚縛の凡夫は生命の尊厳を知らず残酷な結末を招いている。また科学万能の考えが勢いを増し、自然の環境や法則を壊していつてしまっている事も憂慮する。今この時に迎り東大寺の本願、聖武天皇の「動植、咸く榮えんと欲す」との表明された御心に思いを致し、その思いと積尊の教法が全世界、全宇宙に遍満し、圓融無碍、蓮華藏世界が現れる事を願い、また印度山日本寺が伽藍揺ぎ無く、法灯が無窮に続いていく事を願われた。



法要終了後には中川弘一在コルカタ日本国総領事、大菩提寺を管理する大塔管理委員会マハシユエタ・マハラッテイ事務総長、日本寺創建に深く尽力された浄土宗、明顕山祐天寺の現御住職・巖谷勝正上人、また

代読ではあったがパロップタイアリー世界仏教徒連盟会長（代読者はイダノント タイアリー青年連盟事務総長）らから祝辞を頂いた。また当巡拝団に御参加いただいた染織芸術家の大水絢子様より仏教に縁深い蓮を使った蓮布を御奉納頂いた。法要終了後は現地の風習でサンガダーナを行った。サンガダーナとは、サンガII僧団、ダーナII布施という事で法要に出仕いただいた僧侶の皆様が布施として食事を振る舞う事だ。上座部比丘の方々は正午を過ぎてしまうと食事を摂られなくなるので午前十一時半迄には法要を終了し、食事を摂っていたのが一般的な。当巡拝団は法要終了後に仏教学東洋学研究所図書館の落慶法要を行った後、このサンガダーナに随喜し昼食をいただいた。仏教学東洋学研究所図書館の所蔵は、故北條賢三大正大学名誉教授所蔵の約三千冊の仏教書・専門書（北條文庫）や駒沢大学よりの寄贈書、（公財）仏教伝道協会寄贈の各国語仏教聖典など、現時点で約七千冊を所蔵し、日本語以外に英語、サンスクリット語、パーリー語など多岐にわたる。セミナールームも備わっており、今後の活用が期待される。昼食後は休憩となり、日本寺境内の散策や付属している菩提樹学園の見学等が行われた。

竺主、中村国際仏教興隆協合理事長による鼎談が行われた。佐々木花園大学特別教授の講演では梵天勧請のエピソードや仏教再発見の歴史、ブツダガヤがいかに考古学的にも貴重な遺跡であるかなど、約一時間に亘って講義された。鼎談では日本寺がブツダガヤに存在する意義やこれまでの活動などが話し合われた。未だある子供達に仏教の教えを広めていく事、診療施設や予防医療を伝えていく事などが話し合われ、休園日も通園したがる子供が居る事や、卒園児が勉学に励み、保母として菩提樹学園に戻ってきてきてくれている等の実績が紹介された。しかし「十分と思える事はいつまで経っても出てこない」と考えており、「だからこそ次の努力に繋がり、また一人で行っていくのでは無く皆に協力を仰ぎ」と考えられる」と話された。他には「日本寺が日本にとって、世界にとって必要なお寺と成れるように努力していきたい。また仏教勉学の場としても活用していきたい。その為には皆様に今まで以上の協力をお願いしていかなくてはならない。皆様に日本寺の活動をどんどん吹聴してほしい」等のお願いもされた。また聴講者からの質問の時間も設けられ、様々な質問がされた。「五十年を迎えたが、これから先の五十年はどう続けていくか」という質問には「五十年という長い年月の事は中々考えられるものではない。今まで続けてきたものをコツコツと維持し続けていく、それが次の五十年に繋がる」と応えられた。また「昨今

の戦乱に対して仏教はどうすればいいのか」という質問に対しては「釈尊は自らの親族が虐殺される時にも、何も行動は起こさなかった。ただその後自らの辛さ、悲しみを口に吐き出し、そこで踏み止まられた。仏教とは人生の苦しみを無くす宗教だが、その為に辛さを我慢しなければならぬ宗教である」との返答が佐々木先生よりなされ、筆者自身も感銘を受けた。他には「寺院が金儲けをする事はどう思うか」という質問に対しては「寺院の存在理由が僧侶が修行する事である。修行していく為に、寺院の管理者、檀家、信徒総代等が金を稼ぎ、運営や設備充実を行っていくのは良い事である。しかし僧侶自身が金稼ぎに励む等、修行を疎かにして他の事に注力する、といった事は駄目だろう。他にも例えば寺院が運営している医療施設や教育施設の運営や充実の為に金を稼ぐのは仏教的にも問題の無い事だと考える」といった回答がなされ、聴講者の方々の幅広い質問に



答えが出されていた。こういった行事が当巡拝団参加者の仏教への更なる興味を引いたのか日本寺での行事終了後、参加者の有志が自発的に大菩提寺を改めて参拝に行かれた。この日の法要は現地の新聞にも取り上げられ注目を集めた。十二月七日 この日の午前は日本寺にて菩提樹学園四十五周年・光明施療院四十周年記念式典として園児達のお遊戯会が行われ参観した。園児達は元気よくダンスを踊り、また昨今インドでも社会問題になっている「携帯依存」を題材にした劇を披露した。菩提樹学園に支援している（公社）日本仏教保育協会高山久照理事長からは「菩提樹学園は、釈尊への報恩感謝のしるしとして、日本寺周辺の子供達の為に創立され、園舎は日本全国の仏教系幼稚園に通う保護者からの寄付によって建てられたものである」と設立の経緯と先生方への感謝に併せて園児達に「善い事を行い、皆に優しくするというお釈迦様の教えを大事に、これからは先生方のお話をよく聞いて、立派な大人になってほしい」とメッセージが送られ、光明施療院に支援している（公社）全日本仏教婦人連盟加用稔子副会長からは「（公社）全日本婦人連盟からの寄付によって建てられた光明施療院は、施療院の設置など慈善活動を行った光明皇后に因んで名付けられたものであり、以後長きに亘り診療活動を続けてきた。法律の改

定等で無料診療活動が難しくなりましたが、園児のケアや地域の公衆衛生生活の向上活動を、今後も継続できるように支援していく」と仰られた。また園児へは「ダンスやお遊戯はとても素晴らしい、キラキラ輝く姿に感動した。お友達と仲良く過ごし、たのしい園での生活を送ってください」と述べられた。北河原竺主からは、ご参列下さった方々への御礼と共に「純粹無垢な輝いた園児たちのお遊戯で心が温まった。これからも元気にお過ごしください」と園児へ呼びかけられた。その後(公社)日本仏教保育協会、(公社)全日本仏教婦人連盟を始めとする式典に参列した方々と共に、日本より運んだ文房具等のプレゼントを園児達に配布した。



午後からは苦行で衰弱した釈尊に乳粥を供養した事で有名なスジャータが住まわれていたスジャータ村と、釈尊が悟りを開く為の瞑想に入る前に沐浴をされたと伝わるファルグ川(ニランジャンナ川、經典では尼連禪河と伝わる)を観光した。生憎の雨だった為、共に車窓観光となった。

その後はヒンドゥー教の七大聖都の一つであり、釈尊が初めて説法を

行った所謂、初転法輪の故地であるサールナートにも近いヴァーラーナシーへ専用バスにて向かった。予定では六時間の行程だったが、インドらしく遅れ、八時間の移動時間となった。

十二月八日

早朝五時半よりガンジス河に向かい、現地の方々の朝日に向かつての礼拝、沐浴を拝見した。インドでは一般の方々でも信仰心が強く、多数の方が沐浴されていた。その後、我々はボートにてガンジス河川中へ漕ぎ出し、遠目から火葬場や沐浴場を拝見後、御来光に対し法要を厳修した。

ホテルに戻り朝食後、初転法輪の地、サールナートへ向かった。サールナートでは有名なダメークストゥーパの前で法要を厳修した。その際偶々近くに日本人と結婚したインドの方が居り、全員分の紙の敷物をご提供いただいた。御縁に感謝するばかりである。



サールナート参拝後は昼食をとリ、空路にてデリーへ向かった。デリーのホテルに到着後、全員で揃った夕食はこれが最後の為、北河原団長より感謝の意が述べられた。

十二月九日

この日は一日デリー観光に充てられていた。一団は第一次世界大戦戦死者慰霊の為に建築された「インド門」、赤い砦レッドフォードと呼ばれる世界遺産「ラール・キラー」や同じく世界遺産「フマユーン廟」等を見学しインドの国立博物館を観光した。国立博物館では「釈尊真身舍利」が祀られており、通常はその場での勤行は難しいのだが、博物館職員がご配慮くださり厳修することできた。



筆者は北河原団長、筒井副団長、真言宗山階派大本山勧修寺執事・佐々木玄峯師らと共に別行動し、在インド日本国大使・鈴木浩特命全権大使を表敬訪問させていただいた。大使館では鈴木大使御夫妻から

歓待を受け、印度山日本寺開山五十年に對する祝辞を頂き、また日本寺の活動である近隣住民への教育や医療相談に深い敬意を示していただいた。また二〇二二年が日印国交樹立七十周年だった事に触れられ、「改めて日印友好を進めていく」と、仰られた。北河原団長は日本寺も近隣住民への奉仕を続け、仏教を通じての日印友好を深めていきたい、と話された。

では世界でも最も高いミナレットだったが、また先端が破損後修復した過去が有り、当初は大よそ一〇〇メートルの高さが有ったという。表面や周りの建築物にはイスラム様式とヒンドゥー様式の混在した精緻な装飾が施されており、往時の権勢を思わせる。また近くには所謂「デリーの鉄柱」として有名な一五〇〇年もの間、錆びついていない鉄柱も有り、当時の技術力の高さにも驚いた。観光終了後、空港に向かい日本への帰路についた。

十二月十日

朝六時半頃、羽田空港に着き一部参加者がそのまま帰路へ。その後九時半頃に伊丹空港へ着き、巡拝団は解散した。

総評

今回の七日間の仏跡巡拝の旅は印度山日本寺開山五十年記念法要への参列を主目的に据えつつ、インドの文化、風習を垣間見ることができた旅であったと思う。バスでの長距離移動が多かったインドの交通事情により身体的に辛さを感じる場面も有ったが、学び多く、参加者の仏教、及び仏教の生まれたインドの地への理解が深まった旅だった。今巡拝に関わられた全ての方に感謝申し上げたい。(今記事の一部写真は印度山日本寺を運営している(公財)国際仏教興隆協会と、巡拝団参加者である川口至誠堂の川口正義様よりご提供いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。)

